

奄美のウサギはなぜ黒い

奄美市立小宿中学校 一年 大富 樂登

とおんと昔、まだこの奄美の島に人間が住む前のお話です。その頃の奄美の島は、ハブやルリカケス、イシカワガエルなど、いろいろな動物が仲良く平和に暮らしていました。そのため、その頃のハブには毒はなく、ルリカケスは全身がその名のとおりルリ色一色で、イシカワガエルも模様のないただの緑色をしたカエルでした。そして、耳の長い白いウサギたちも住んでいました。動物たちは、海に向こうにある国・ネリヤカナヤから流れてくるさまざまなものを分けへだてなく分かち合い、幸せに暮らしていました。

ところがある日、そんな平和な島に、もう一つの海に向こうから黒い不穏な存在がやってきました。これまで数々の他の島を征服してきた邪悪な神・マングー神です。マングー神は、高い空の上から奄美の動物たちに言いましました。

「この豊かな島は、私がいただく。お前たちは今すぐ出て行け。今日から十日の後に、この島に火を放つ。死にたくなければ、それまでの間に大人しくこの島から出て行くのだ。」

マングー神の声は、不気味に島全体に響き渡りました。その声を聞いて、動物たちはあわてました。風のうわさで「マングー神という悪い神が、いろいろな島を焼きつくしている。」という話を聞いていたからです。どうしよう、どうしよう。これまで幸せに暮らしてきた動物たちは、上を下への大さわぎです。

意を決したハブが言いました。

「僕のするどいキバで、かみついてやっつけてやる。」しかし、マングー神は空の彼方。ハブがいくら鎌首をもたげても、届くはずはありません。氣勢をそがれたハブを横目に、今度はルリカケスが言いました。

「私が飛んで行って、くちばしでつついてやる。」

ルリカケスは勢いよく空に向かって飛び立ちましたが、強い風によって地面にたたき落とされてしまいました。

もう、どうすることもできません。動物たちは悲しみにくれてしまいました。しかし、ウサギたちだけは、

「絶対にこの島から出て行くものか。どんなことがあっても耐え抜いて、この島を守ろう。」と心の中で固く決意するのでした。

動物たちが何もできぬまま、十日が経ってしまいました。マングー神は言いました。

「十日が経ったぞ。これで良いのだな。」

そう言うと、マングー神は島の北に火を放ちました。火

は見る見るうちに南に向けて燃え広がっていきます。ウサギたちは言いました。

「負けるものか。何としても島を守るぞ。」

ウサギたちは火に立ち向かうため、次々と海へ飛び込み、全身の毛にたっぷりと水をしみこませ、横一列になって火を食い止めます。マングー神も負けてはいられません。さらに強い炎をウサギたちに浴びせます。ウサギたちは体の水が乾くと交代で次々と海へ飛び込み、冷たい水を再び全身にまとうと、また炎に立ち向かっていきました。ハブはその冷たい体でウサギに寄りそい、ウサギを炎の熱から守りました。ルリカケスは翼をうちわのように使い、炎を吹き消すとともにウサギの体を冷やしました。イシカワガエルは水をたっぷりとしみこませたこけを背負い、ウサギたちのすき間をうめました。その様子を見て、マングー神はうろたえました。

「いったいどうしたことだ、この島の動物たちの力は。これまでのどの島にもない力だ。」

いったいどれだけの時間が経ったでしょう。あたりは静まりかえり、空は青く、海も以前のように穏やかになっていきます。ふと、誰かがさけびました。

「マングー神はもういないぞ。」

「僕たちはこの島を守り抜いたんだ。」

そうです。マングー神はこの島の動物たちの「島を守り

きる」という強い意思に負け、逃げていったのでした。動物たちは、みんなで力を合わせ、マングー神を追い払ったのです。

動物たちは抱き合い、みんなで涙を流して喜びました。しかし、喜び合う動物たちのその姿を見ると……。

ハブは、マングー神に対する怒りがキバに宿り、毒をもつようになりました。ルリカケスは熱風を受け続けたため、ルリ色の体の半分が焼けて赤くなりました。イシカワガエルは、背負い続けたこけが焼き付いて残り、それが模様となりました。そして、その身をていして島を守り抜いたウサギたちの長い耳は、焼け落ちて短くなり、白い毛はすすで黒くなっていました。

マングー神がいなくなって長い月日が経ちました。今では、ハブは奄美の森を傷付けるものを攻撃する森の番人となり、ルリカケスは、奄美の美しさの象徴となり、背中に模様のできたイシカワガエルは日本一美しいカエルと言われるようになりました。

そして、白いウサギはいなくなり、黒くなったウサギたちはいっしょに「アマミノクロウサギ」と呼ばれるようになったそうです。